

市場経済コース」研修

主催 国際協力事業団（JICA）・帯広市が支援

とき 平成9年10月13日

テーマ 「野菜の生産と市場動向」

講演者 富田 義昭（当研究所・常務理事）

○平成九年度 農業改善事業全国連絡会議現地研究会講演

主催 農業改善事業全国連絡会議

とき 平成9年10月22日

テーマ 「地域農業・これからのめざす姿」

講演者 七戸 長生（当研究所・所長）

○消費生活リーダー研修講座

主催 北海道消費者協会（くらしの教室）

とき 平成9年10月30日

テーマ 「有機農産物の現状と課題」

講演者 酒井 徹（当研究所・専任研究員）

DATA FILE

関連事項 / DATA

北海道大学農学部
〒060 札幌市北区北9条西9丁目
☎011(716)2111

北海道新聞社
〒060-91 札幌市中央区大通西3丁目6
☎011(210)5600

室蘭工業大学
〒050 室蘭市水元町27番1号
☎0143(47)3133

北海道庁 農政部農政課
〒060 札幌市中央区北3条西6丁目
☎011(231)4111

千代田町役場
〒731-15 広島県山県郡千代田町
大字有田504
☎0826(72)2111

編集後記

大雪で初雪を観測したというニュースを聞いたとたんに朝夕が、めつきり寒くなってきました。二七号が皆さんのお手元に配布される頃には平地でも降雪の便りが聞かれることでしょう。

消費の伸び悩みが景気全体の足を引っ張っており、その原因は消費税のアップにあるのではとか、大型減税を止めためだとか原因究明に学者と称する人々がいろいろ意見を述べているが、どうも景気の減速沈滞が我々が感じて以上以上に深刻な状況らしい。せっかくな回復してきた雇用不安にまで至らないことをつづしの利かない高年齢労働者は祈るのみ。

先日長年ドイツに住む友人と雑談を

したが、休暇で訪ねる森の概念が日本と違うという話になった。アルプスの麓を除くとほとんどがフラットなヨーロッパの森は奥の方まで下草が刈られ、誰かによつて管理されていることが判る、日本の自然そのままの森もいけれど、虫も多いしキャンプはちょっとの意見だった。

確かにヨーロッパには我々素人が見ても木を切り払えば立派な農地になりそうな森が各所に散在している。森を意識的に残しそこを管理していることが国民のコンセンサスを得ているのである。

今、論議されている食料・農業・農村基本問題調査会の主要な論点の一つになつている中山間地域へのデカップリング問題を考えるとき、やはり先進地にはそれなりの受け入れ土壌があるものだと、一人納得させられたが、北

海道ではどうなるものか。

収穫の秋、テレビでまさかりカボチャの種の保存と品種改良に取り組んでいる農家が特集されていた。ホクホクとしたやつを食へたくて近所の八百屋やスーパーを覗いてみたが無い。やつと通勤の途中店頭に並ぶつやつやのやつを発見。早速炊いてみたが見事なはずれ、未熟でべとべとのカボチャはどんな利用方法があるのか。



▲富良野市野菜集出荷風景

お詫び

「地域と農業」第二七号の二二―二五頁に掲載しましたエッセイ「リンゴ園から生まれた本」は構成ミスが多数あったため、あらためて全文を修正再掲載いたします。

執筆者宇佐美暢子様、文中に登場した小平ご夫妻を始め購読者の皆様に心からお詫び申し上げます。

リンゴ園から うまれた本

北海道新聞文化部

次長 宇佐美 暢子

岩手県水沢市の小平林檎園は今、一年で最も忙しい時期を迎えている。一町四反のリンゴ畑には「千秋」や「津軽」が実り、「富士」が収穫される十一月までであわだしい日々が続く。働き手は小平範男さん（四五歳）、玲子さん（四二歳）夫妻と、範男さんの両親、三歳になった双子の娘達の歓声が畑に響いている。

このリンゴ園から昨秋、一冊の本が発刊された。宇佐見英治著「明るさの神秘」。宮沢賢治について宇佐見さんがこれまで書いた論文やエッセーに強くひかれた小平夫妻がまとめた。

夫妻と宇佐見さんの出会いは九年前になる。絵の好きな範男さんが出かけた東京のタゴール展で偶然二人は居合わせた。四年後、宇

佐見さんは水沢を訪れ、夫妻の案内で賢治ゆかりの地を回り、霧が流れ光があふれる高原で賢治について語り合った。

「記念に」と夫妻が用意したのは二冊の手作りの本であった。宇佐見さんの賢治に関する論者を古い本からコピーし、和紙の表紙をつけ和としした。表紙の文字は宇佐見さんがその場で墨書、以来、三人がそれぞれ所持する大切な記念の一冊になった。それが今回の本の基礎となった。

「人間は太陽の光とは違った別のひかりがなくては一日も生きてゆけない存在である」「悲光」より」という宇佐見さんの言葉は夫妻にとって、農業という自らの進む方向を確認する意味で大きな存在だったという。

正規の流通ルートを通らないこの本を、夫婦は心だん農協などを通さずリンゴを販売しているのと同じように、一冊ずつ手渡して行った。

賢治について「明るさの神秘」のあとがきで宇佐見さんはこう述べている。「賢治によつて敗戦直後

の不遜な絶望から救われ、また、ヘッセと片山（敏彦）先生をとおし、ほんとうのおのれ自身を見出し、生きることを教えられた」。そして小平夫妻について「賢治の精神をもっともよく生きている人だ」と思う。

範男さんはリンゴ農家の三代目の一人っ子として生まれた。子供のころから農業は大きらいだったという。地元の進学高校に進んだが、学ぶことの意味を見失い、上京して入学した明治学院大学でもウツウツとした日々が続いた。卒業後、東京でアルバイトをし、盛岡の書店に勤めるうちに「悔いなく生きられるかどうか問題で、百姓を選ぶしか道はない」と決意して故郷へ戻る。

ところが「大根一本も育てたことのない」範男さんにとつて「畑は私の無知と非力を映し出し、私は自己との対峙を否応なくせまられ、農とは正直な仕事なのだと思うようになった」。心の変遷を範男さんは率直に文章に綴った。「生き方、食い方、かせぎ方」（徑書房、一九八三年）の中に収録されている

る。「農に生きる根を掘る―ふるさとリンゴの歌」。三十一歳のときだった。

これを読んで感銘を受け、範男さんに手紙を書いたのが玲子さんだ。「今の農業に疑問を持たずに跡取りになったとすればかえってこわい。悩みを突き抜けて農業をやるうとしているところに好感が持てた」と当時を振り返る。二人の文通が始まった。

玲子さんは江別市のサラリーマン家庭の長女として生まれ、高校卒業後、新聞社の総務部門で働いていた。通勤途中の電車の中で詩集を読むのが日課で、その一つとして出合ったのが宮沢賢治の「春と修羅」だった。

以来、賢治の世界に惹かれ、「農民芸術概論」を読むうちに「岩手で農業を」の思いが強まった。自分で作って自分で食べる農業が本当に生きると言うことではないのかと思えるんです」という。

十三年勤めた新聞社を辞め、山荘で住み込みのまかないの仕事などをしながら、手探りで考える数年が続いた。

範男さんとの文通で互いの理解を深め合い、賢治の古い書物を嫁入り道具に、北海道から水沢に来て十一年になる。結婚式もない静かなスタートだった。

「農業の現場にいられる幸せがある。農業をしているとよく見えるモノがある。リンゴを手渡しながら、人と人のつながり、広がりもおもしろく思っている」と楽しそうに言う。

「農民芸術概論」は、「ずいぶん忙がしく仕事もつらい」農民たちとともに、「もっと明るく生き生きと生活する道を見付けたい」と考えた賢治が著した。

宇佐見さんのいう「太陽の光とはちがう別のひかり」は人間をほんとうに生きる方向に導くであろうと、玲子さんは思ったという。

範男さんも「明るさの神秘」のしおりで「農業に未来があるかどうかは、この場で述べることではありません。けれども遠くを見ていなければ農業をやり続けることが困難なことは事実です。遠くを見ること―そのための視界が開かれたのは、私の場合、宇佐見先生

の「雲と天人」との出会いによってでありました」と書いている。

農家が農業として自立していくのが難しいのが今の日本の現状だ。小平林橋園が、除草剤は使わず農薬を出来るだけ減らして育てたりリンゴを、農協を通さずすべて個人販売で直接手渡す方法を選択したのは、そうした日本の農業の問題に、ささやかだが抵抗しているからだ。

夫妻が出版した「明るさの神秘」は千冊を完売し、宇佐見さんはその賢治論で、花巻市の第七回宮沢賢治賞を受賞した。九月にはあらためてみず書房から出版された。